

叙述を基に、自分の考えを表現できる子どもを育てる国語科学習指導
～「理解確認」と「理解深化」を位置付けた学習過程を通して～

要約

学習指導要領（平成29年度告示）では、育成を目指す資質・能力が「(生きて働く『知識及び技能』の習得)」「(未来の状況にも対応できる『思考力、判断力、表現力等』の育成)」「(学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力、人間性等』の涵養)」の三つで整理された。つまり、知識及び技能を基に新たに創造する思考力、判断力、表現力等を育成し、新たな場面に活用しようとする力が涵養されていくことが求められる。しかし、本学級の子どもたちは、説明的文章を読む際に、読み取ってきた筆者の主張や論の進め方に対して、叙述を基に自分の考えをもち、表現するところまで十分に至っていない。

そこで、国語科の説明的文章の学習において、読みの視点や読む方法を示し、「理解確認」と「理解深化」を学習過程に位置付けた。そして、言葉や叙述に着目し、筆者の主張や論の進め方を捉え、既存の知識や経験と結び付けながら自分の考えを表現する子どもを育てたいと考え、「叙述を基に、自分の考えを表現できる子どもを育てる国語科学習指導」をテーマとして設定した。具体的には、説明的文章において、以下の4点から具体的な支援を行い、研究を進めた。

1 1単位時間における「理解確認」「理解深化」の位置付け

根拠となる叙述や段落から筆者の主張や論の進め方の理解の定着を図る段階と、既習の知識や経験と結び付けて自分の考えを形成し、表現する段階を位置付ける。

2 読みの視点・読む方法の提示

教材に応じて、着目すべき言葉や叙述などの視点や方法を提示する。

3 深める問いの設定

文章の内容や自分の考えを深める問いを設定する。

4 自分の考えを書く活動の設定

筆者の主張や論の進め方に対する自分の考えを書く時間を設定する。

実践の結果、以下のような成果(○)と課題(●)を得た。

- 1単位時間に「理解確認」「理解深化」を位置付けたことは、筆者の主張や論の進め方を明確にし、既習の知識や経験と結び付けて考えを形成することに有効であった。
- 読みの視点・読む方法を提示したことは、子どもが着目する言葉や叙述を明確にして読み進めるのに有効であった。
- 深める問いを設定したことは、叙述に立ち返りながら、筆者の主張や論の進め方に対して、自分の考えを知識や経験と結び付けながら構築したり、文章の内容をさらに深めたりする上で有効であった。
- 自分の考えを書く活動を設定したことは、1単位時間で深めた自分の考えを基にして、筆者の主張や論の進め方に対して既習の知識や経験と関連付けながら考えを再構築し、自分の言葉でまとめることができるようにする上で有効であった。

● 深める問いの系統性

● 各学年における読みの視点の明確化

キーワード 「理解確認」 「理解深化」 読みの視点 読む方法 深める問い 意見文

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

学習指導要領(平成29年度告示)では、汎用的な能力の育成を重視する潮流を踏まえつつ、学校教育が長年育成してきた「生きる力」をより具体化し、資質・能力が三つの柱に整理された。三つの柱とは「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く『知識及び技能』の習得)」「理解していること・できることをどう使うか(未来の状況にも対応できる『思考力、判断力、表現力等』の育成)」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力、人間性等』の涵養)」である。つまり、いつでもどこでも使いこなすことができる知識及び技能を習得し、知識及び技能を基に未知の状況に対応したり新たに創造したりする思考力、判断力、表現力等を育成し、学びに対する目的をもち、学びを新たな場面に進んで活用しようとする力が涵養されていくことが重要となっていく。このことから、叙述を基にして習得した知識及び技能を駆使して自分の考えを吟味し、課題意識をもって新たな自分の考えを表現できる子どもを育てる本研究は意義深い。

(2) 高学年国語科学習のねらいから

小学校学習指導要領国語編では、第5学年及び第6学年の「C 読むこと」の目標として、「事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。」(叙述を基に、文章の構造や内容を把握すること)、「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。」(構成や叙述を基に、文章の内容や形式を精査・解釈すること)、「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。」(理解したことなどを基に、自分の考えを形成すること)と示されている。つまり、目的に応じて必要な叙述を見付け、文章構成や筆者の考え、論の進め方に着目して読み深め、自分の考えを形成し表現することが大切である。以上のことから、文章構成を捉え、内容や筆者の主張、論の進め方について読み深め、既存の知識や経験と結び付けながら自分の考えを形成し表現していく本研究主題を設定した。

(3) 児童の実態・指導上の課題から

本学級の子どもたちは、説明的文章において、「はじめ・中・おわり」の文章構成を確かめたり、反例等の論の進め方の工夫について気付いたりすることができている。しかし、自分の考えを書く際に、これまで読み取ってきた筆者の主張や論の進め方に対して、叙述を基にして、自分の考えを書くことに課題があることがわかる【資料1】。そこで、国語科の説明的文章において、着目すべき視点を示しながら筆者の主張や論の進め方を捉え、既存の知識や経験と結び付けながら理解を深め、自分の考えを表現する活動の在り方を明確にする必要があると考える。



【資料1 児童の実態】

2 研究主題の意味

(1) 主題の意味

① 「叙述を基にする」とは

事実と感想、意見などとの関係を押さえ、文章全体の構成を捉えることである。具体的には、読みの視点や読む方法から文章の内容や構成を捉え、精査・解釈しながら筆者の主張や論の進め方を理解することである。

② 「叙述を基に、自分の考えを表現できる」とは

事実と感想、意見などとの関係を押さえ、文章全体の構成を捉え、筆者の主張や論の進め方に対して、既習の知識や技能を駆使して自分の考えを吟味し、既習の知識や経験と結び付けながら、自分の考えを形成することである。具体的には、次のような子どもの姿である。

叙述を基に、自分の考えを表現できる子どもの姿

- 筆者の主張や論の進め方について、課題意識をもって読み進める子ども
- 着目する言葉や読み方を基に、筆者の意図を読み深める子ども
- 既習の知識や経験と文章全体の構成を基に、自分の考えを形成できる子ども

(2) 副主題の意味

① 「理解確認」とは

着目する言葉や考え方を教師が説明し、説明されたことを基に子どもが自分の力で着目すべき叙述や段階を見付け、読み方の定着及び理解したことを教師と子どもと一緒に確認する学習過程である。具体的には、自分の考えを表現するために、文章の内容や構成を十分に理解することである。そのために、教師が説明した着目すべき言葉や考え方を使って、筆者の主張や論の進め方の理解の定着を図る。

② 「理解深化」とは

確認した筆者の主張や論の進め方を基に、「連想」「活用」「評価」「構築」の観点から「深める問い」を設定し、内容の読みを深める学習過程である。具体的には、他の場面はどうなっているか、類似した内容を基に話し合ったり、感想を出し合ったりする「連想」。自分の生活や考えを振り返り、自分の考えをもつ「活用」。筆者の考えに対して、立場や視点を変えて、理由を付け加えたり、筆者の考えが妥当であるかを検討したりする「評価」。筆者の意図することや考えに対して、自分の考えを構築する「構築」がある。この4つの観点から「深める問い」を精選したり事例を提示したりする。

③ 「理解確認」と「理解深化」を位置付けた学習過程とは

1 単位時間の学習の前半に「理解確認」、後半に「理解深化」を位置付ける。本研究は、「教えて考えさせる授業」(市川伸一氏)の理論より1 単位時間を「教師の説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価」の4つの学習過程で構成している。学習の前半「理解確認」において、筆者の主張や論の進め方について理解したことを、「理解深化」に

において既習の知識や経験と結び付けて自分の考えを形成することにつなげる【資料2】。

3 研究の目標

国語科の説明的文章を読む学習において、自分の考えを表現できる子どもを育成するために、「理解確認」「理解深化」の過程を生かした表現活動の在り方を究明する。

考えさせる			教える	
自己評価	理解深化	理解確認	教師の説明	予習
○本時の振り返り ○「今日の学習で」を書く (分かったこと・分からなかったこと)	○内容(筆者の主張・論の進め方等)や自分の考えを深める ○深める問い ・連想 ・活用 ・評価 ・構築	○読みの視点・読む方法を基に、説明的文章の内容理解や定着	○読みの視点・読む方法の提示 ○本時で捉えさせたい内容を説明	○説明文の音読 ○叙述に線を引く (筆者の主張・意見・事実・事例等)

【資料2 教えて考えさせる授業】

4 研究の仮説

国語科学習指導における筆者の主張や論の進め方に着目しながら読む学習において、1単位時間の前半に「理解確認」、後半に「理解深化」を位置付けることで、筆者の主張や論の進め方に対して、既習の知識や技能を駆使して自分の考えを吟味し、既習の知識や経験と結び付けながら自分の考えを形成することができるであろう。

5 研究の概要

(1) 検証の対象

大刀洗町立菊池小学校 第5学年1組(20名)

(2) 検証の内容と方法

めざす子どもを育成するために、以下のことに重点をおいて取り組む。

① 1単位時間に「理解確認」と「理解深化」を位置付ける

1単位時間の前半に「理解確認」を、後半に「理解深化」を位置付ける。具体的には、「理解確認」において、本時で捉えさせたい言葉や考え方を教師が説明し、それを基に、子どもが自分の力で着目すべき叙述や段落を見付け、筆者の主張や論の進め方についての理解や定着を図る。「理解深化」において、読みを深めたり自分の考えを深めたりさせ、既習の知識や経験と結び付けて自分の考えを形成し表現させる。

② 読みの視点・読む方法を提示する

教材に応じて読みの視点と読む方法を提示する。文章構成、筆者の考え、論の進め方の中から、自分の考えをつくるのに必要な叙述や段落を見付け出すために、着目すべき言葉や叙述など読みの視点と読む方法を提示する。

③ 深める問いの設定

「理解深化」段階で、文章の内容や自分の考えを深める問いを設定する。深める問いを設定することで、一つの叙述に着目したり、文章全体に立ち戻ったりしながら、筆者の考えや論の進め方に対して、自分の考えをつくったりさらに深めたりしていくことができる。

④ 自分の考えを書く活動の設定

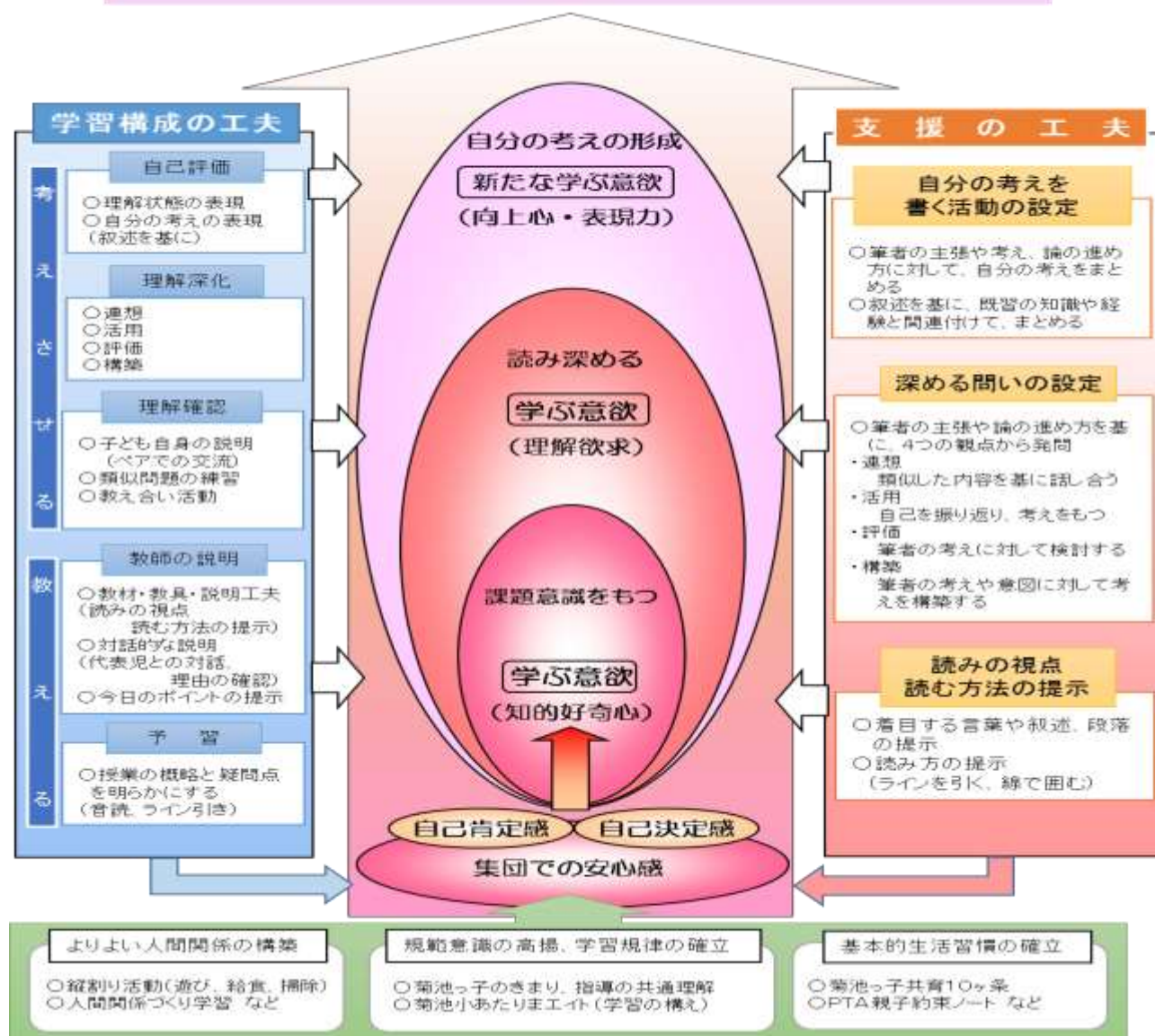
学習の終末に、筆者の考えや論の進め方に対して自分の考えを書かせる。自分の考えは、筆者の考えや論の進め方に対して、これまでの自分の経験や既存の知識を関連付け、叙述を基に、自分の言葉で表現させる。

6 研究の計画

月	研究計画	月	研究計画
5	理論研究	10	検証授業Ⅰ
6	理論研究、実態調査	11	検証授業Ⅱ
7	研究主題の設定・作成、教材研究	12	データの分析とまとめ
8	教材研究、指導案作成	1	研究のまとめ・報告書作成
9	指導案作成	2	研究報告

7 研究構想図

叙述を基に、自分の考えを表現できる子どもを育てる国語科学習指導
～「理解確認」と「理解深化」を位置付けた学習過程を通して～



8 研究の実際

実践事例 1 令和元年10月3日 大刀洗町立菊池小学校 第5学年1組 20名

(1) 単元 説明のしかたの工夫を見つけ、話し合おう 「天気を予想する」

(2) 本単元の指導にあたって

本単元の指導にあたっては、筆者の主張や論の進め方の工夫を読み取り、それに対する自分の考えを、既習の知識や経験と結び付けながら意見文にまとめることができる子どもを目指した。そのために、「筆者の主張や説明の仕方の工夫を読み取ろう」というめあてに対して、読みの視点や読む方法を確認し、筆者の主張や論の進め方に対する自分の考えを書く活動を位置付けた。

(3) 指導の実際

① つかむ段階 (1 / 6)

この段階では、筆者の主張を捉えさせるために、感想を交流し、学習の見通しをもたせることがねらいである。

まず、教師が教材文を読み、「内容に対して」という読みの視点を提示し、感想を書かせた。感想を基に、分かりやすい文章であることを確かめ、本教材文の構成や表現の工夫を考え交流させた。「天気予報だけではなく、自分でも天気を予想することが大切だと初めて知った。」と、多くの子どもが、筆者の主張する内容について、感想を書いていた。そこで、「筆者の主張と説明の仕方の工夫を読み取ろう」という単元のめあてをつくった。

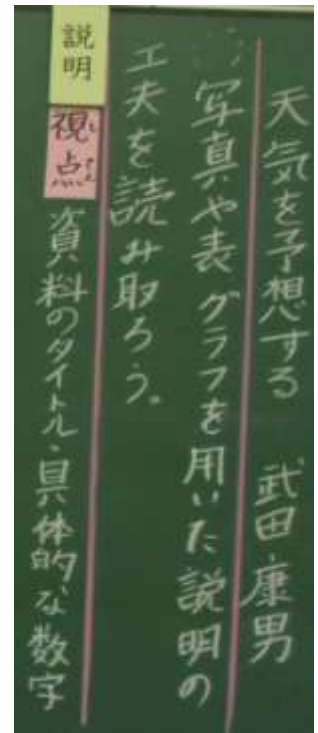
【考察】「内容に対して」という読みの視点を提示して感想を書かせたことで、分かりやすい文章であることを確認することができた。また、学習の見通しをもたせたことで、筆者の主張や論の進め方の工夫に着目しながら、読み進めていこうという課題意識をもたせることができた。

② つくる段階 (2～5 / 6、本時 4 / 6)

この段階では、筆者の主張を基に、「問いと答えの繰り返し」「写真や表、グラフの活用」「対比を用いた事例」という論の進め方の工夫における筆者の意図を読み取らせることがねらいである。

まず、本時の読みの視点として「資料のタイトル」「資料とつながる具体的な数値や言葉」と、読む方法として「文章と写真やグラフをつなげる」「筆者の考えとつながる」を確認し、事例1での資料を活用した説明の工夫を読み取らせた【資料3】。その際、文章と資料が一目で分かるプリントを持たせ、視覚的工夫をしてつながりを説明した。子どもたちは、文章と資料がつながる部分に気付き、文章を分かりやすくするために資料を活用しているという工夫を捉えることができた。

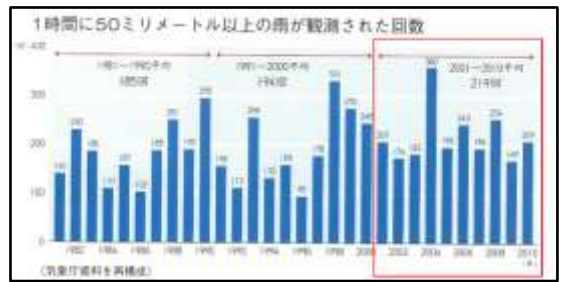
次に、「理解確認」を学習過程に位置付けた。ここでは、読みの視点や読む方法を基に、事例2での文章と資料のつながりを確認し、資料を活用した説明の工夫を捉えさせた。子どもたちは、「事例1も事例2も、資料があることで、文章が分かりやす



【資料3 「読みの視点」】

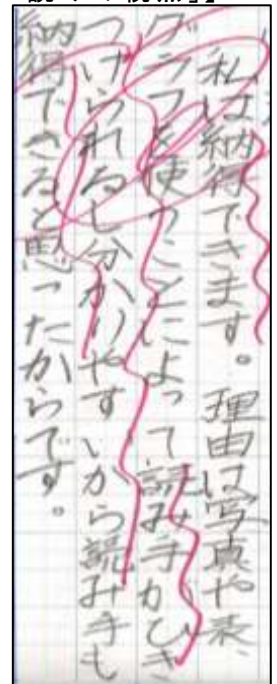
くなっている。」と、資料を活用した説明の工夫を捉えることができていた。

続けて、「理解深化」を学習過程に位置付けた。ここでは、事例2のグラフを用いて説明した筆者の意図を読み深めさせた。文章と対応していない部分にも目を向けることができるように、対応している部分を線で囲んだグラフを提示した【資料4】。子どもたちは、筆



【資料4 「読みの視点」】

者が文章を分かりやすくするためだけに、グラフを用いているのではないことに気付いた。そこで、「筆者は、なぜ説明していない前の年の突発的な天気の変化まで、グラフに載せているのだろうか。」という「評価」の観点からの深める発問を行った。子どもたちは個人で考えをつくった後、グループで話し合い、「昔は少なくて、現在は多くなってきたということを知りやすくなるため。」「前の年の平均も分かるようにするため。」という考えを出していた。そして、「説明していない部分を載せることで、天気予報が100%的中することは難しいという、筆者の考えを読み手に納得させることができる。」という、筆者の意図を読み深めることができていた。



【資料5 今日の学習で】

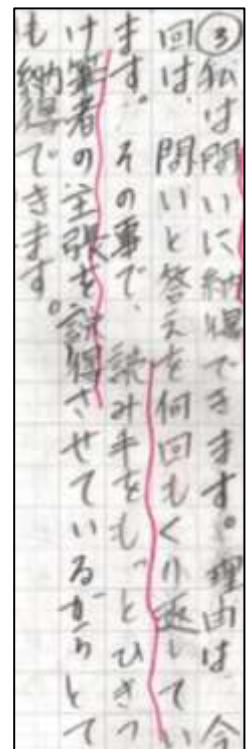
最後に、自己評価では、筆者の説明の工夫に対する自分の考えを「今日の学習で」でまとめさせた。子どもたちは、「表やグラフを使うことで、読み手が引きつけられ納得しやすくなるので、筆者の工夫に納得できる。」と自分の考えをまとめることができていた【資料5】。

【考察】説明している部分を線で囲んだグラフを提示し、評価の観点からの深める発問をしたことで、子どもたちが自分の考えをつくることができた。しかし、筆者の考えに立ち返らせることができなかったため、グラフを用いた筆者の意図にまで目を向けて考えを書くことができなかった。

③ いかす段階（6 / 6）

この段階では、「天気を予想する」で読み深めてきたことを基に、筆者の主張や論の進め方に対する自分の考えを書くことができることがねらいである。そこで、これまで書きためてきた「今日の学習で」を参考にしながら、筆者に対する自分の考えを書かせた。子どもたちは、「問いと答えの繰り返し」「写真や表、グラフの活用」「対比を用いた事例」に対する自分の考えを書いた【資料6】。

【考察】単元を通して、自己評価で筆者の主張や論の進め方に対する自分の考えを書かせたことで、「問いと答えの繰り返し」「写真や表、グラフの活用」「対比を用いた事例」に対する自分の考えを書くことができた。



【資料6 自分の考え】

実践事例 2 令和元年12月4日 大刀洗町立菊池小学校 第5学年1組 19名

(1) 単元 事例と意見の関係をおさえて、自分の考えをまとめよう
「想像力のスイッチを入れよう」

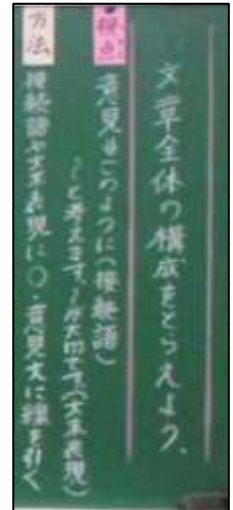
(2) 単元の指導にあたって

本単元の指導にあたっては、事例と事実の関係を押さえ、筆者の主張や論の進め方に対して、既習の知識や経験と結び付けながら、自分の考えをまとめることができる子どもを目指した。そのために、「事例と筆者の意見がどのような関係になっているか」というめあてに対して、読みの視点や読む方法を確認し、筆者の主張や論の進め方に対する自分の考えを書く活動を位置付けた。

(3) 指導の実際

① つかむ段階（1～2 / 7、本時2 / 7）

この段階では、筆者の主張を捉えさせるために、文章構成を押さえ、筆者に対する自分の考えをまとめさせることがねらいである。まず、本時の読みの視点として「このように(接続語)」「～と考えます。～が大切です。(文末表現)」と、読む方法として「注目する言葉を丸囲み」「筆者の意見に線を引く」を確認し【資料7】、事例1の筆者の意見を読み取らせた。その際、文章全体が分かるプリントを持たせ、筆者の意見がどこにあるのか視覚的に場所を説明した。子どもたちは、注目すべき接続語や文末表現に気付き、事例1の筆者の意見を捉えることができた。

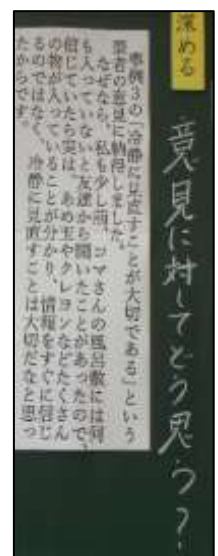


【資料7 読みの視点】

次に、「理解確認」を学習過程に位置付けた。ここでは、事例1で確認した読みの視点や読む方法を基に、事例2と事例3での筆者の意見及び筆者の主張を確認し、それぞれの事例の中に意見が含まれている工夫を捉えさせた。子どもたちは、「筆者は、情報を活用しながら、自分で想像し、判断することが大切と主張している。」と筆者の主張を読み取ることができていた。また、「今までは事例だけだったが、事例の中にも意見が入っている。」と、事例の中に意見がある工夫や結論で主張をまとめている工夫も捉えることができた。

続けて、「理解深化」を学習過程に位置付けた。ここでは、筆者の意見や主張に対する自分の考えについて叙述を基に、既習の知識や経験と結び付けながらまとめさせた。筆者の意見や主張と自分の経験とを結び付けやすいように、子どもたちが身近に感じられる例文を提示した【資料8】。

子どもたちは、本単元の導入時に行った図形やマラソンでの思い込み体験を思い出し、筆者の意見とつながることに気付いた。そこで、「筆者の意見に対して、どのように考えますか。」という「構築」の観点からの深める発問を行った。子どもたちは、個人で考えを作り、「私はこの文章を読む前、図形の問題に引っかかってしまったので、まだ分からないと考えることが大切だと納得しました。」「りんごには蜜が入っていると聞いていたのに、私が食べるりんごにはいつも蜜が入っていません。だから、まだ分からないよねと考えることが大切だという



【資料8 例文】

9 研究の成果と課題

(1) 全体考察

【資料11】【資料12】は、授業実践1(10月)と授業実践2(12月)において、単元の前半と後半で、「叙述を基にした、自分の考え」「筆者に対する自分の考え」「自分の考えを書くことが難しい」の三つの観点からみた割合を示したものである。

「叙述を基にした自分の考え」については、実践を重ねたことで、筆者の主張や論の進め方と既習の知識や経験とを結び付けながら、考えをまとめることができている子どもの割合が増加している。また、「単元の前半」と比べて「単元の後半」の方が、自分の考えをつくることのできる子どもの割合が大きいのは、「理解深化」を学習過程に位置付け深める問いを発問したことで、筆者の主張や論の進め方に対して、授業を重ねるごとに考えが深まっていったからであると考えられる。【資料13】は、事前と2回の実践において、筆者の主張や論の進め方に対しての意見文について、三つの観点から表した子どもの割合である。意見文を書く際に、叙述を基に、自分の考えをまとめることができた子どもは74%となり、事前と比較して69ポイント増加した。これは、「理解確認」を位置付け、読みの視点を基に着目する言葉や叙述を明確にししながら、読み進めることができたからだと考えられる。

(2) 研究の成果

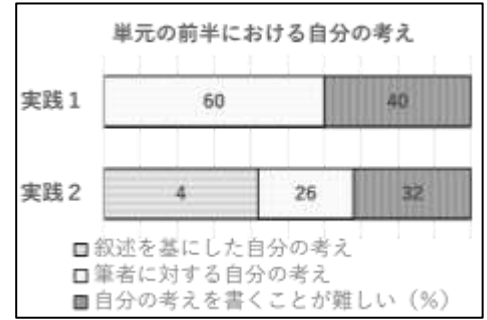
- 1単位時間に「理解確認」「理解深化」を位置付けたことは、筆者の主張や論の進め方を明確にし、既習の知識や経験と結び付けて考えを形成することに有効であった。
- 読みの視点・読む方法を提示したことは、子どもが着目する言葉や叙述を明確にして読み進めるのに有効であった。
- 深める問いを設定したことは、叙述に立ち返りながら、筆者の主張や論の進め方に対して、自分の考えを知識や経験と結び付けながら構築したり、文章の内容をさらに深めたりする上で有効であった。
- 自分の考えを書く活動を設定したことは、1単位時間で深めた自分の考えを基にして、筆者の主張や論の進め方に対して既習の知識や経験と関連付けながら考えを再構築し、自分の言葉でまとめることができるようにする上で有効であった。

(3) 研究の課題

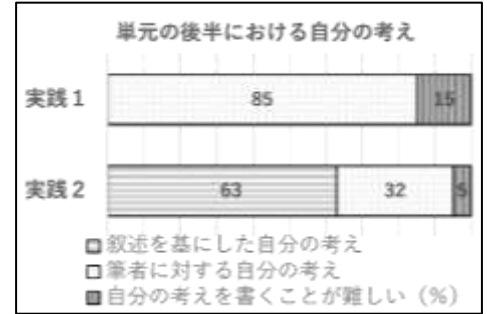
- 深める問いの系統化
- 各学年における読みの視点の明確化

<参考文献>

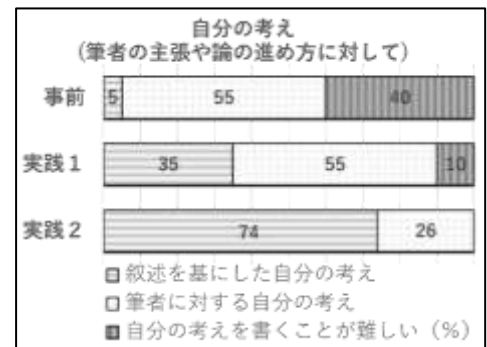
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』(平成29年告示)
- ・市川伸一『「教えて考えさせる授業」を創る』(2008年)



【資料11 単元の前半の結果】



【資料12 単元の後半の結果】



【資料13 実践後の結果】